

ホトトギス

昭和二十五年三月二十八日印刷
昭和三十一年十月十日第一刷
平成十五年八月二日発行
第百六十八号

ホトトギス

八月号



旬日記

汀子

平成十四年八月四日 関西野分会

流灯の闇が流れてをりにけり
川面ゆく流灯に添ふ心かな
手にびびると通ふ線香花火かな
火玉落ちたる手花火のそれから

八月四日 下萌句会

旅晩夏雨に齟齬ありたることも
忘れぬし夜空仰ぎぬ天の川
銀漢の空失ひて久しかり
揚花火準備の空のととのへり

八月五日 ロイヤル俳壇

夏瘦を気にせし頃をなつかしむ
しのび寄る気配晩夏の朝かな
夕焼の稜線に刻々の朝かな
夏瘦もせぬ食欲も衰へず
夕焼の変幻見つつ着陸す

八月八日 清交社

まばたけは西瓜提灯笑ひけり
立秋といふ朝の間のありにけり
配られし中身も西瓜提灯よ
赤き目の西瓜提灯瞬きぬ
水音の溝蕎麦抜けてゆきにけり
目と口の表情西瓜提灯に
灯籠を包める闇の消えにけり
灯籠になほ悲しみの消えざると

八月十日 北海道ホトギス同人会

八月の雨の蝦夷地へ着陸す
しのび寄る気配は蝦夷の秋なりし
初秋の蝦夷の心を問うて旅
八月の蝦夷ははじめに訪ふ
八月十日 北海道ホトギス俳句大会前日句会

着けばすく句会といふも蝦夷の秋
札切りの雨は残暑を寄せつけず
心切りかへて秋めく札幌に
八月十一日 北海道ホトギス俳句大会

なごりあり旅路遮る霧さへも
医学部につづく歯学部露深し
ただ空気旨し秋めく札幌に
八月十三日 大阪倶楽部

活け終へてこぼれし露に手を濡らす
涼しげに残暑の卓を飾るもの
稲妻の走れば闇に浮かぶ雲
忘れぬし夜空を仰ぐ流れ星
予告などして流星の見えぬ夜
水引の花に枝折戸開けてあり
八月十三日 綿業倶楽部

蝦夷の旅終へて残暑の帰路の待つ
空港の一步に待つてあし残暑
遠き色なほ遠き色みなカンナ
八月十六日 悼築山能波様
露ほろと零れし木々の騒立ちぬ

八月十七日 摩耶山俳句大会
秋めくや今日より句帳新しく
弔句書き露けき心抱き来し

薄紅葉には素通りの山路かな

八月二十日 有恒倶楽部

初嵐とは身の内に吹くことも
秋の蟬終の命を全うす
盆の月揚げば何か通りけり
風渡るとき声を張る秋の蟬
ひそかにも水引の紅主張せり
鳴きつづく限りを秋の蟬として
八月二十日 無名会

初嵐には気づかずに出掛け来し
先づ音に誘はれてゆく揚花火
手花火の終の火玉を落しけり
をさまると思ひ出掛けし初嵐
用意せし手花火を又しまひけり
朝の間の季節移りぬ初嵐

八月二十一日 夏潮句会

ぎりぎりの稿書き上げて秋涼し
流灯や日本海も遠からず
守宮なら怖くないとはいひながら
吹き荒るる風に新涼ありそめし

八月二十三日 時雨会

手も足も河内踊に乗り切れず
連組みて踊りし若さあるつもり
六甲は都会の外れ天の川
渋滞の麻布十番てふ踊

八月二十五日 野分会
幾仏心に抱きて流灯会
子の興味いつまで線香花火かな

フィリピンの旅（その二）

稲畑汀子

五日間の旅の第一夜を夕食会に招かれていた日本大使公邸へ行くためにロビーに集合した。大袈裟なものではないからと言われていたが、私はロングドレスを着て行くことにした。

昔、わが家で三人の嫁たちが姑を囲んで洋裁のお稽古をしていた。先生は小林聖心女子学院の私の一年以上級の田中一枝さんである。彼女は田中千代洋裁学校の師範を取った優秀な先生で、我々は驚くほど様々な物を縫うようになり、一人前の洋裁師そのけの大物を縫ってきた。安い布地を買って来て仕立てる楽しみがあった。私はその殆どが太って着られなくなってしまったが、その中で太っても着られる気に入ったロングドレスがあった。海外の旅にはいつもそのドレスを旅袍に入れることにしている。さらっとしていて皺にならない生地で着物の絞りをぼかしたような柄が上半身にあって痩せていても太っていても変わらないように見える仕立てになっていて便利なのである。日本ではなかなか着る機会のないままになっていた。

「汀子先生、すてきー」

猫にも衣装である。それを着ると少しはスマートに見えることを発見した。

「ありがとうございます。これ、私が仕立てたのよ」

「え？ うそー」

「ほんとうなの！ これ幾らの生地だと思う？」

「さあ……」

「一着五百円ですよ」

「え？ うそー」

昔の貨幣価値は今とは違うが、子育ての頃に買ったのであるからその時でも安かったに違いない。いまから三、四十年前のことである。

「本当よ、私が縫って、今でもまだ着られるものの唯一のものかも知れないわ」

「へえ、信じられない」

五人が揃ったので迎えるワゴン車に乗り込んだ。少し暗い道の方へ曲ると、その辺りは公館が立ち並ぶ深い木立の庭が隔てた家が垣間見られて、そのどの門にも警備員が立っていた。

「あれはアメリカ大使館ですよ」

田中大使の説明を聞きながらやがて日本大使公邸の門に車はすべり込んで玄関に着いた。

「やあ、やあ、いらっしやい」

気さくに迎えられた高野大使がさしのべる手を握り返した。

「今日はお招きに預かりまして、ありがとうございます」

「いやいや、今日は家内が日本に帰っていきまして行き届きませんが
お許し下さい。この度、田中大使に勧められて地球ボランティア協
会の活動の援助の一端を担う許可が出ましたよ」

「それはよかったです」

「フィリピンの若い人達に技術を教えるためのマシン百台を買う援
助を何とかお願いして許可が出たのです」

「まあそれは素晴らしいことですな」

田中元大使と高野大使の話を聞き相槌を打ちながら我々は食卓に
案内された。

「今日は、田中大使がフィリピンで生のお刺身を食べないというこ
とを聞いていたので、今日は特別に新しいお刺身を用意しましたよ」

高野大使がにこにこ言われる。

「え、ほんとうですか？」

「今日は、是非召し上がって頂こうと用意しました」

「それは、それは」

私は何ともユーモアのある大使同士の会話に聞きはれていた。白
い制服を着た若い男たちがきびきびサービスをしてくれる。美味し
い和食が次々出てきて舌鼓を打った。

「田中大使はお刺身を召し上がっていますね」

「はい。日本では大好物なのですが、フィリピンでは遠慮してい
るのです。でも今日は頂きましょう」

「コーヒーは庭で差し上げましょう。どうぞお立ち下さい」

高野大使の案内で広い芝生の庭に招じられる。高い庭園灯が照
らす芝生は美しく刈り込まれ、高いマンゴーの木の幹に寄生してい
る蘭の花が咲いて匂っている。パンダという種類であることはすぐ
分った。空には星が一つ見えた。

「満天の星空を想像していたのですが、フィリピンの夜空も明るい
のですね」

「はい、都会の空は濁っていますよ」

夜風が心地よいのはやはり常夏の国だからであろう。ふと足元が
むずむずした。虫が芝生から這い上がって来たのだろうかと足を動
かした。またしばらくするとむずむずする。今は夏なのだど気がつ
いた。蚊がロングスカートの中に潜り込んだのかもしれない。

「蚊が居るみたい」

こっそり、美奇さんに囁いた。

「ここは夏なのですわね」

「コーヒーを頂き終わると又部屋に戻って来た。」

「レディースルームを使われますか？」

「はい。どちらでしょうか」

「その先の右側のドアを開けてください」

私は言われた通りドアを開けるとソファの置かれた部屋の
先にもう一つドアがあり、そこがお手洗いになっていた。ほつとし
てスカートを振ると、裾から一匹の蚊がブーンと上に舞い上がった
のでパチンと叩いたが逃げられてしまった。

私はそこに蚊を残したまま部屋に戻ったのが少し気になっていた

た。

フィリピンの貧しい学校にはお手洗いが無かったので、田中大使が在任中に全ての学校にお手洗いを作られたという話が弾んでいた。

「だから僕のあだ名はトイレット大使なのですよ」

本当に立派な大使が各国で人に知られることもなく努力しておられることを知って胸が熱くなった。

日本の寒い冬がいつの間にか私の頭から消え去っていた。フィリピンの旅の第一夜が静かに更けて行く。私は心にほのぼのとしたものが広がって行くのを感じながらホテルへの帰路の車に揺られていた。

廣太郎句帳

廣太郎

平成十四年八月一日 蕉心会

川を見る 歴史の果に原爆忌
黒点も赤々と灼け大西日
蕉像と目が合うてを油照
油蟬羽根一枚となり果てし
タクシーを降り炎帝の生け贄に
縄跳びに 漢裸で興じをり

八月七日 一水会

ジャスミンの終の色置く帰宅かな
虚子の星いよいよ燃えて星月夜
八月八日 土筆会

風向の変はりてよりの法師蟬
法師 蟬 壁を共鳴板として
天帝の威か新秋を遠ざけて
八月二十日 草木瓜会

新涼に押され稲城は遠からじ
新涼や稲城への歩も軽やかに
悪筆の 我も硯を洗ひけり
展示さる虚子の洗ひし硯とや
新涼や都心に臨む富士の威よ

八月二十二日 登高会

大文字の火に衆生界鎮もれり
大文字鎌倉五山には虚子が
大文字人といふ字に消えゆけり
桐一葉落ちて信号変りけり

稲妻を窓に 田園五楽章
落ちてより風に従ひゆく一葉
稲の殿夫唱婦随でありにけり

八月二十三日 時雨会

刀豆や今日のカレーは極辛で
天の川男三瓶女三瓶孫三瓶
踊見の指が躍つてをりにけり
八月二十四日、二十五日 西尾茅花句会

釣竿の一ト震へして鯨現るる
三十年 振りの感 触 黙の秋
新涼を纏ひ釣竿揺れてをり
鯨釣の五センチ程の引きなりし
川下に人を集めて 黙日和

猫鳴けば秋蟬つられ鳴きにけり
澄む水をかき混ぜてゐる子等の足
落鮎に子等転がつてをりにけり
錆鮎の色に焼かれてをりにけり
八月二十七日 若水会

仲秋や丸ビル天に伸び切つて
糸瓜棚軒を昏めてをりにけり
仲秋や表情変る丸の内
仲秋の風を纏ひし巨大ビル
八月三十一日 夢二忌前夜句会

花野道乾ききつたる靴の音
風吹いて芒フーガを奏でをり
蝶翔たせ松虫草は野の色に
黙々と人点々と 松虫草

雑詠 汀子選

み吉野の山路阻みてゐる朧 東京 河野美奇
 傘ささぬ間に上りけり花の雨 同
 また春炉恋しき夜となりにけり 同
 東京に雨水結びし日の訣れ 神戸 山田弘子
 人は逝き天地は春を深めたる 同
 初桜目を逸らしなば開くべし 同
 みよし野や花と眠りて花と覚め 京都 安原 葉
 みよし野の花の眠りを誘ふ雨 同
 みよし野の花に忙中閑を謝す 同
 池凍り一山の朝集約す 福山 竹下陶子
 雪晴の大山そそり三瓶坐す 同
 八十路てふ未来はてなき明の春 同
 花の黙解きゆきたる日差しかな 芦屋 黒川悦子
 まるで息止めてゐるかに花の山 同
 それからはねむれぬままや花の宿 同
 飯寓にも松を飾ればそれらしく 日野 木村享史
 飯寓出て富士ある方を恵方とす 同
 昼の月よりも淋しき冬桜 同

何かもの光の見えて春の立つ 龍野 浅井青陽子
 寂光の日々のなほあり春浅し 同
 紀州路の菜の花明り沖明り 同
 一病にわが行く先の朧なる 高崎 吉村ひさ志
 朧とはクラリネットの音色にも 同
 アスパラにワインとモーツアルトかな 同
 年の夜をあたふたと夫逝きにけり 茨木 堀 恭子
 夫在りしごとく初湯の加減見て 同
 寒菊や仕事一途に生きし夫 同
 曳いてきし犬に曳かれて青き踏む 熱海 嶋田摩耶子
 校庭の変らぬ母校春の泥 同
 過去未来無くいまはただ花の下 同
 春潮の底まで見ゆる日ざしかな 東京 今井千鶴子
 若布を拾ふ帰りかけては又拾ふ 同
 引き残す波のかたちの磯菜屑 同
 梅探る宰府古道訪ねつつ 福岡 松尾緑富
 詣客疎に飛梅はまだ固し 同
 冬濤に立ち防壘に佇みて 同
 桜木の神に安らふ落花とも 榎原 稲岡 長
 歳々の花の追憶人もまた 同
 花に会ひ落花を浴びる別れかな 同
 屍埋むるごとしきりなる落花 八代 山下しげ人
 白く散りゆき夜桜となりにけり 同
 近くゐて遠まなざしに見る残花 同

雑詠句評（七月号より）

客人に埋火小さき積翠忌 石川 辻口静夫

積翠忌とは能登の俳人大森積翠の忌日で、積翠は昭和五十九年一月十四日九十歳で命終。社会的にも信望厚く、能登地方の伝統俳句の普及につとめ、伝統俳句の基盤を築いた功労者のお一人である。その温厚な人柄に多くの俳人が育てられたが、能登人にとっては欠かすことのできない忌日である。小さな埋火に偉大な師を偲びながら、その鴻恩を思い知らされている客人たちの心情や情景がよく伝わってくる句で、情緒ゆたかな季題「埋火」が見事に詠まれている。

（葉）

能登の俳人大森積翠師は温厚で誠実な方でこの地方ばかりではなく多くの伝統俳句の俳人を育ててこられた。いつも埋火を絶やすことなく訪ねた客人を炉辺に招き入れた。今も尚師と慕う人達が積翠忌を修し偲ぶのである。しみじみと情の深い句で

ある。

（汀子）

ひとひらの梅こぼれたるその朝 東京 今井千鶴子

一読してすぐ「お別れの句」「惜別の句」といった感じが伝わって来るが、如何なものであろう。この感じは、下五の「その朝」から生れてくる。

そしてお別れする人を、梅に見立てて詠まれているので、「品格」も「情」も備わっている句である。

（忠彦）

一読、追悼の心持が伝わってくる句である。何処となくはない句であるが、実際に見た情景として鑑賞しても一句の背景に流れる情がこの句から感じ取れる。下五に「その朝」と言い切ったことで余韻が深く、梅の一片が散ったその朝の印象を亡き人に重ねた作者の心情が伝わってくる。

（汀子）（以下略）

若水集

廣太郎選

梨の花・春の海

春の海平家入水のむかしふと 東京 手塚基子
 波の底都ありとぞ春の海 同
 春の海水の地球とうべなひし 同
 夕月の棚に平らや梨の花 神戸 千原叡子
 二十世紀を曳きずりて梨の花 同
 子規虚子を偲びて須磨の春の海 同
 春の海平ら地球の自転止む 小樽 伊藤玉枝
 春の海揺るる体内記憶かな 同
 春の海濤立ち上げる勢ひなく 同
 触れてみて冷えなき日和梨の花 高崎 吉村ひさ志
 山の日にみんな上向き梨の花 同
 棚なせる枝もかがやき梨の花 同
 貴婦人と言ふは船にも春の海 石川 受川秋郊
 母の如かく穏やかに春の海 同
 父の如とときには怒り春の海 同
 きらめきを空に拈げて春の海 東京 谷口和子
 夢はゆめ呼ぶ明るさや春の海 同
 梨の花川風白につまづきて 同

丘陵の起伏覆ひし梨の花 富山 荒木かづを
 春の海大観覧車回り初む 同
 春の海互ひの未来語り合ふ 同
 春の海やがて運河となる水路 京都 福井 仁
 戻れば春の海また深みどり 同
 春の海水尾消すことを考へず 同
 耀へる川面や梨の花盛り 同 安原 葉
 一寸揺れて授粉に応ふ梨の花 同
 分乗の盃舟浮く春の海 同
 長城の消えゆく邑の梨の花 東京 寺出訓三
 梨咲けるオアシス遙か絹の道 同
 梨咲くや砂漠の果の土の家 同
 朝靄に浮びし島や春の海 同 川口利夫
 島陰に走れる渦や春の海 同
 残照にのこれる舟や春の海 同
 波音の琴の音となる春の海 枚方 中嶋陽太
 春の海波の間に間の睡魔かな 同
 戦場の空母の下の春の海 同
 戦場へつづくこの先春の海 小豆島 山本照雪
 立ち止まるときに囁く春の海 同
 菩提とは目覚めるころ春の海 同
 寄せる音ばかりが聞こえ春の海 川崎 寺嶋とし博
 渦に渦のまれてのんで春の海 同
 遠く見て近くに聞くや春の海 同

若水集句評 廣太郎

翳りなき空へ湧く白梨の花 高槻 会田仁子

一般的には果実を採る為に柵で栽培している「梨の花」であるが、却ってその整然と咲き揃っている様子は壮観である。空へ向く視線が空の色と花の色との美しさを見せている。

春の海水の地球とうべなひし 東京 手塚基子

春の海ると夕日引きずりぬ 滋賀 北村和久

地球はよく「水惑星」と呼ばれるのを御存知の方も多いのではないだろうか。大部分が海であり、生命の営みにも大いに関係のある「水」。「春の海」を見た作者の、生命の神秘にも思いを馳せているような表現が、季題と見事に取り合わされている。

この「るるる」という擬態語が何ともびつたりと嵌っている。夕暮れ時の太陽がだんだん沈んで行く様子が、季題を通して伝わってくる。実際作者は太陽の沈む「音」としても聞いておられるのかも知れない。

丘陵の起伏覆ひし梨の花 富山 荒木かづを

地の底の底の胎動梨の花 札幌 青野浩子

梨の生産地であれば、それこそこの時期「梨の花」は大地一面奇麗に咲き続けているのである。丘の面を覆い尽くしている花の拡がりや立体感をもって目の前に迫ってくる。

札幌

植物にとつて、根が一番大切である、と筆者はどこかで聞いた覚えがあるが。外からは見る事の出来ない地底の営みこそが奇麗な花を咲かせるのだらう。「梨の花」の生命力が見て取れ、又その果実にまで及んでいるようである。(以下略)

戦場へつづくこの先春の海 小豆島 山本照雪

この句を詠まれた時は、丁度イラク戦争が起っていた時期で、その事を詠まれていると考えられるが、普遍的には、歴史上世界の何処かでは常に戦争があつたように聞いている。長閑な「春の海」であるからこそ戦争の悲劇がひしひしと伝わってくる。